昭和二十一年

春雨や子にせがまれて面つくり

読み＝はるさめや　こにせがまれて　めんづくり
季語＝春雨（春）

泰元、満三歳の春。のどかな父子の風景である。
『雲母』派は、連句の発句（ほっく）となるような堂々たる句（立て句）を第一としたが、一転、家族特に我が子の句も避ける所ではなかったという。黙榮にも我が子や妻の句が多い。しかし、ただ可愛い我が子、厨房の妻、としてだけで詠んでいるのでないところは流石黙榮である。

地靄こめ苺は花を開きそむ

読み＝じがすみこめ　いちごははなを　ひらきそむ
季語＝苺の花（春）

霞も春の季語であるが、ここでは『苺の花』が季語ととるべきであろう。地表付近に漂う霞、当然そこにある湿った黒い土と白い苺の花の鮮烈な対比である。

泰元は寝起きの良い子

寝起きよき子に大輪のぼたんかな

読み＝ねおきよき　こにたいりんの　ぼたんかな
季語＝ぼたん（春）

寝起きが良いとは、朝何度も起こされなくとも起き、起きたら機嫌良く活発に活動すると言う意味。
牡丹のかなり大きな株が庭の隅にあり、四月の半ばになると見事な花を咲かせた。今も名残の株が残っている。
泰元の寝起きの良さは、学校に行くようになってからも変わらず、早く学校に行きたがる泰元を「はやくいかぬと遅くなる」という歌をもじって「おそくいかぬと早すぎる」とからかったという。

飼屋の灯洩れて庭木の緑濃き

読み＝かいやのひ　もれてにわきの　みどりこき
季語＝飼屋（春）

飼屋は蚕を飼う部屋、小屋のこと。早朝の光景か夜なのかは判らないが、蚕を飼うとは短期間であるが、長時間労働である。緑が濃くなったと言う感慨を詠んでいるので、一年で一番沢山の蚕を飼う春蚕である。

齊（アマバ）れの穂麦の風に耕せり

読み＝あまばれの　ほむぎのかぜに　たがやせり
季語＝穂麦（夏）

齊れは、雨上がりの良い天気のこと。黙栄の好きな言葉である。
穂が出た麦、穂麦も黙榮の好みで、何句も詠んでいる。確かに、色、形、勢い、誠に結構なものである。
百姓にとって一年で一番良い日なのかもしれない。

消毒の噴霧虹なす薄暮光

読み＝しょうどくの　ふんむにじなす　はくぼこう
季語＝薄暮光？（春？）

黙榮の気持ちとしては春の夕暮れ＝薄暮、であろう。しかし歳時記には春の季語として薄暮も暮光もあげられていない。虹は夏の季語であるが、ここでは人工の虹なので素直に虹＝夏の季語とすることはできない。

黙榮に聞いても「いいだ、ほんなこたあ、春だっちゅこんは判るら」ですまされそうである。

榮助は消毒という作業が好きで、最晩年まで消毒や除草剤散布をやっていた。除草剤散布に使った機器を洗った水を花壇や芝生にぶちまけて家族と悶着を起こすのは再々であった。イネ科などの生命力漲る雑草をも枯らす農薬用除草剤は、規定濃度の何十分の一程度の薄い機器洗浄水でも花壇や芝生には甚大な被害をもたらすのである。

果樹栽培を盛んにしていた頃の殺虫剤には、サリンの親戚で散布による事故頻発のため後に使用禁止になったパラチオン系のホリドール（＝神経性毒ガスの二ラン）を好んだ。これを散布した果樹園は「寂として動くものの無し」という態になったそうである。

くろの葱皆花咲きて四月盡

読み＝くろのねぎ　みなはなさきて　しがつつき

季語＝四月盡（春）、

四月盡は、四月の晦日、即ち四月三十日の事。

くろとは畑の周囲の縁のこと、ぐるっと一周をくろと呼んでも良いが、感覚として作物の列に平行している側の縁をくろと呼びたい。ここには葱、そら豆、大豆、ほうれん草などを作る。葱は茎が太くなく青い部分も食べる青ネギが普通であった。すなわち、葱は関西系である。

葱の花、葱坊主は春の終わりを告げる花で、これが咲き揃う頃には桑は新芽を拡げている。従って葱坊主が出てから霜が降りると養蚕農家は大打撃を受けた。晩霜による霜害には保険をかけていた。

暮遅し夕餉待つ間の農日記

読み＝くれおそし　ゆうげまつまの　のうにっき

季語＝暮遅し（春）、

榮助は死ぬまで営々と日記をつけていた。その日記は、この句集『槻蔭』の解釈の強力な参考文献になるであろうが、あの悪筆かつ独特の崩し字を解読しようという気持ちは起きない。あの膨大な日記はこのまま埋もれて行くのであろう。もったいないが、仕方が無い。

昭和二十年代の百姓の生活を研究しようと云う時には参考資料になるであろう。博士論文の二、三本は書けるかもしれない。

大根の花の小乱れ日照雨（ソバエ）過ぐ

読み＝だいこんの　はなのこみだれ　そばえすぐ

季語＝大根の花（春）、

ここでいう大根の花は花壇栽培用の紫色のものではなく、畑の野菜の大根に花が咲いたのである。花が咲いた大根は食べられないので、掘らずにほったらかされたものか、種を採る為の物であろう。どのみちそんなに大規模に咲いているのでなく、数本の大根の花である。

苺太る五月の土を耕せり

読み＝いちごふとる　五月のつちを　たがやせり

季語＝いちご、五月＝ともに（夏）季重ね

露地栽培の苺が実る六月生まれだった黙榮は多くの苺の句を詠んでいるが、全部植物としての苺の句で、苺の実そのものや食べるシーンの句は無い。畑の土にへばりついて可憐な花を咲かせ、赤い実を付ける苺という植物が好きだったのかもしれない。

家の前の畑にかなりの面積で苺があったのをかすかに覚えているが、最

盛期に換金するまで大規模に至っていたかどうかは判らない。泰元によると、正確な記憶は無いが売るには至らなかったであろう、との事である。

甘藷(イモ)苗剪る露にまみれて朝曇り

読み＝いもなえきる　つゆにまみれて　あさぐもり

季語＝甘藷苗（夏）

厳密には季節が違う季語が同時に使われているという禁忌の季違いである。しかし、露を秋の季語というのは都会の詩人の感覚で、百姓の感覚では晩春から早朝の仕事（朝作り＝あさづくり）には露はつきものである。秋だの夏だのと言っていられない。

甘諸は、さつまいものこと。当時は米の代用の貴重な食料である。植えつけは、苗床の種芋の蔓から苗を切り取り、畑の畝に差し木する。甘諸は秋の収穫の事を考えて、あらゆる作物中でも最も深く高く畝を切り、畝の高い方に植え付けていく。

甘藷の栽培は好平の方が熱心で、食用さつまいもの栽培が流行らなくなってなってからも、鶏の餌用として作っていた。

弟弟子（？）の飯田龍太も甘藷作りの名人と自称している。

山羊の乳(チ)房のゆたかに新樹光充つ

読み＝やぎのちの　ゆたかにしんじゅ　ひかりみつ

季語＝新樹（夏）

新樹は初夏の樹木のこと。

山羊は、おとなしく手間がかからず、屑野菜や畑の雑草を刈ったものを与えておけば乳に変えてくれる奇蹟の動物。どこの家でも山羊を飼っていた。私も山羊の乳で育った。

蔓豆に手をやる雨後の夕明り

読み＝つるまめに　てをやるうごの　ゆうあかり

季語＝蔓豆　蔓豆の花（春）、

歳時記にある季語が無い。季節は初夏であると考えられるから栽培している蔓豆はまだ実らない。おそらく初夏の夕明かりの中に咲く野生の蔓豆の紫色の可憐な花に心惹かれたのであろう。

のぼりつめ穂麦は風ある天道虫

読み＝のぼりつめ　ほむぎはかぜある　てんとむし

季語＝天道虫（夏）

季重ねであるが、穂麦を登りつめ、風に揺られてはてどうしたものかと思案げな天道虫が主役で、季重ねを忌む理由である主題の散漫さがない。いわば良い季重ねである。穂麦が好きな黙榮らしい良い句である。

麦の穂に西日さやけき天道虫

読み＝むぎのほに　にしびさやけき　てんとむし

季語＝麦の穂、西日、天道虫＝ともに（夏）、季重ね

さやけき、さやか（秋）＝季違い

こちらは季節の言葉を山ほど含んで散漫である。前の句の方がはるかに良い。黙榮としては俳句の実験なのかもしれない。黙栄は時々季語や季節の言葉だけでできている句を作っている。

桐咲いて春迅(ハヤ)くすぐ兵の墓地

読み＝きりさいて　はるはやくすぐ　へいのぼち

季語＝桐の花、桐咲いて（夏）

薄紫で華やかな桐の花は私も好きな花である。黙榮も好きであったとみえて六句先にも桐の花の句がある。昭和二十一年春の墓所にはそこここにあった大東亜戦争の戦死者の新墓を詠んだものであろう。勿論、兵の墓は大東亜戦争戦死者の物だけではないが、この山村の墓所に兵の墓が目立つようになったのは大東亜戦争後である。

昭和二十一年春では生死不明の兵士や未帰還の兵士も多々いた。

草篭のふれて散りけり桑の花

読み＝くさかごの　ふれてちりけり　くわのはな

季語＝桑の花（春）

桑の花とはまた地味な。

桑の花は一ミリも無い薄緑がかった白の花がぎっしり集まった二センチほどの長さの房状の花で、桑のかなり太い枝に直接咲く。虫媒花か風媒花か判らないが、この花はやがて桑の実になる。

草篭は牛や山羊の餌の草を刈って入れる目の粗い背負い篭のこと。

濡れもどる五月の雨や昼湯焚く

読み＝ぬれもどる　さつきのあめや　ひるゆたく

季語＝五月の雨（春）

濡れてでも何でも作業続行必須の農繁期ではない余裕が感じられる。五月の初めか、濡れたらまだ冷たい季節である。

刈り草のこぼれ流るる野川かな

読み＝かりくさの　こぼれながるる　のがわかな

季語＝刈り草、草刈（夏）

榮助の縄張りで、初夏に草刈をしてそれが川に流れるとなると『山本＝やんもと』田んぼでのことであろう。

草を刈るささ濁る雨後の小川べり

読み＝くさをかる　ささにごるうごの　おがわべり

季語＝草を刈る（夏）

この句も前の句と同じ場所同じ時であろう。

ささは。些些＝ちょっとだけ、取るに足らずか、騒騒＝水の流れの勢いのよいことか。雨後のと言っていること、この辺の川は一寸した雨でも濁って増水する事から、後者と取りたい。

耕すや花桐甘き香をおくる

読み＝たがやすや　はなぎりあまき　かをおくる

季語＝花桐、桐の花（春）

耕す、は春の季語であるので一見季重ねであるが、耕すは百姓榮助にとって四季何時でもある日常の作業なのでここでは季語と取るべきではなく、花桐のみが季語である。

桑の実に染まりし舌をみせ合いぬ

読み＝くわのみに　そまりししたを　みせあいぬ

季語＝桑の実（夏）

桑の実は養蚕用の現役の桑畑にはあまり生らず、「赤とんぼ」の歌の文句のように山の畑にほったらかされた木に鈴生りになる。アントシアニンがパンチが無い呆けた味であるので、小さい子にしか人気が無い。

あまりにも簡単に手に入りすぎるところも、山村の悪たれ小僧どもには物足りなかったのかもしれない。

横浜郊外の丘陵や河原などの至る所に単独ではあるが、桑の木があるのは、昔の養蚕の名残であろう。

鶴見川の河川敷の桑の木の実。すぐ脇に少年野球のグラウンドがあるが、勿論誰も採って食べたりはしない。

私も写真を撮っただけである。

新府祭　雄雛を売る店

雛店に人立つ春の祭りかな

読み＝ひなだなに　ひとたつはるの　まつりかな

季語＝春祭（春）

甲斐の武田最後の城、新府城址にある藤武神社のお祭りは四月二十日である。下を走る県道端から、二四九段の石段の脇から、山上の神社の建物

の回りから、さらに広場まで露店が並んだ。
前書きでわざわざ雄雛を売る、と断っているようにここで売っているひよこは雄であると言う話だった。
名物は榧飴（かやあめ）で、竹の皮に包まれた物凄く歯にくっつく飴だった。売り子の「さあ、甘いよ、甘いよ、甘いかーなんてもんじゃありませんよ。お父ちゃんが舐めると、明日の朝（あしたなさ）はお母ちゃんまで甘くなってるよ」という売り声が懐かしい。
神楽も盛大に奉納され、二四九段の石段を駆け上がり、拝殿神楽殿辺りで若い娘を追いかけ、露店を踏み壊しての狼藉を働く暴れ神輿も勇壮だった。近郷近在随一の春祭りであった。

あかつきの地靄に濡るる青苺

読み＝あかつきの　ぢがすみにぬるる　あおいちご
季語＝青苺（春）
朝作り＝朝食前の涼しい時間を使っての農作業中の景色であろう。黙栄の好きな「畑にある植物としての苺」の句である。

泰元、五味千代造翁より螢を貰う

初螢子は大切にのぞきいる

読み＝はつほたる　こはたいせつに　のぞきいる
季語＝螢（春）
五味千代造翁とは一軒おいて西隣りの五味善幸君の先々代で、特攻戦死した五味大礎陸軍大尉の父上である。世代交代のズレもあってこの頃には、五味家にも新家にも小さな子供がおらず、並び三軒で唯一の子供が泰元であった。

麦秋や提灯に似し月上がる

読み＝ばくしゅうや　ちょうちんににし　つきあがる
季語＝麦秋（夏）、
下五が、月上がる、は典型的な秋の情景の句になるのであるが、この句では麦秋が主役である。日の長い時期、月上がるまで仕事をしていたのであろう。同じ物を見ても、詩人の感覚と百姓の感覚は違う。百姓榮助と俳人黙栄はそのギャップに悩んだであろう。黙栄に季重ね、季違いが多いのもその悩みの現れ、解決の為の実験かもしれない。
麦秋や、と強く切って麦秋の季節と麦畑という舞台を用意し、そこに月が上がる光景を演出している。切れ字『や』をうまく使っている。

秋涼の小雨に濡れつつ苺うえ

読み＝しゅうりょうの　こさめにぬれつつ　いちごうえ
季語＝秋涼（秋）
また苺作りの作業の句である。苺は苗を買ったのではなく、雑然と伸びたランナーを切り取って整理しつつ、苗として植えていったのであろう。

桑あげてひたる後湯や夜の秋

読み＝くわあげて　ひたるあとゆや　よるのあき
季語＝秋の夜（秋）
桑あげては蚕に桑を与えての意味。その作業そのものも「桑あげ」という。後湯は誰かが入った後の湯。志村家では風呂の順番は割と自由で都合がついた順に入るのが常であった。
休眠していない蚕は二十四時間桑を食べ続けろ。最後の五齢では、その食べる量で繭の大きさも決まるので桑をあげる方も重労働である。畑から

桑を摘んで来て、飼屋＝蚕室の蚕に桑を上げ終わると真夜中になったであろう。翌朝は暗いうちに起きて、自分の朝飯の前に蚕の朝食の桑あげをし、桑摘みに出なければならない。

この時代には、三齢位までは桑の葉っぱを畑で摘んでいたと思われる。

昭和三十年頃から年間条桑育と言って、ごく小さな稚蚕への給桑を除いて、春夏秋、一年中いつの季節の蚕でもどの生育期であっても桑は枝のまま切ってきて枝のまま上げるようになった。蚕を放つ蚕座も所謂蚕棚はなくなり、床や地べたに直接設けるようになった。これで作業が楽になった分沢山の蚕を飼う事になったので重労働は変わらなかった。

帰農して木犀の香に秋蚕飼う

読み＝きのうして　もくせいのかに　あきごかう

季語＝木犀（秋）、秋蚕（秋）＝季重ね

木犀の香りがする時期の蚕は一年の最後の秋蚕＝晩秋蚕＝ばんしゅうさん、である。寒くなるので蚕室は暖房するが、それでも蚕の喰いの勢いは夏ほどではないので、やや余裕がある。秋蚕は桑畑をきれいに裸にしていくので、秋蚕の桑取りは気持ちが良いと榮助もゆりも言っていた。

榮助は二十一歳で学生から教員になったので、以前百姓をしていた訳ではない。それなのに帰農と言っているのは、生家の深澤家も百姓であり、榮助の少年時代は同じような養蚕農家であったことから、回り道したが結局蚕を飼う百姓になったのか、という感慨であろう。

この句は次の句を先に記載し、消去線を引かずに併記してある。

『帰農して花木犀に蚕飼いかな』

2001年10月6日。
流石にこの時はもう蚕飼いはしていない。
85歳のゆりが木犀の木の下を行く。

ほのぼのと裸身ぬくとく秋耕す

読み＝ほのぼのと　らしんぬくとく　しゅうこうす

季語＝秋耕（秋）

次の句も含めてこの句と前の句とは三部作の連作であろう。後半二句は蚕は終わっているようなので季節的には少し後のようである。

秋蚕が終わっても、稲刈りの前に、桑畑の整理、野菜の収穫や秋の植え付け、さつまいも掘り、などやる事はいくらでもある。

風のない秋の日は暑く感ずる。畝を切ったり、何か掘ったりの力仕事は上半身裸の方が気持ちが良いであろう。

ぬくといは温かいの古語で方言という訳ではない。標準日本語では使わなくなっているが、地方では残っている。甲州でも頻繁に使う言葉である。

秋耕やわがなりはいの影法師

読み＝しゅうこうや　わがなりはいの　かげぼうし

季語＝秋耕（秋）

帰農三部作の最後で百姓になった自分に一寸ひねくれている。

通草蔓湖に展ける岨路かな

読み＝あけびつる　うみにひらける　そばぢかな

季語＝通草蔓（秋）

家の周りにはこんな風景は無いので、束の間の息抜きにどこかに旅しての句である。あけびの若い蔓は、地上を走る時は曲がらずに一直線に伸びていく。荒れた道を伸びるその蔓の先に湖が見えたというのであろうが、どこの湖なのかはこの句からは判らない。

秋耕や昼の茶が沸く野良かまど

読み＝しゅうこうや　ひるのちゃがわく　のらかまど

季語＝秋耕（秋）

家と藤井田圃を往復するには、車が無い時代には坂道を歩いて小一時間かかったので、田んぼ仕事には弁当を持って行った。大きな薬缶に入れた水でお湯を沸かすのは、お手の物の焚火である。坂井遺跡にある縄文時代のような石で囲った竈をつくったのであろう。原始炉である。

味噌を炊く大土間暮るる竈火かな

読み＝みそをたく　おおどまくるる　かまびかな

季語＝味噌を焚く（冬）

味噌も醤油も家で手造りした。

麹は近くの醤油醸造屋さんから種を分けて貰い、家で蚕室を利用して温度湿度管理して増やした。これを「花付け」と呼んだ。ゆりはこの花付け部屋で一酸化炭素中毒にかかり、危うく命を落としそうになった事がある。

味噌は麦麹の豆味噌。味噌玉は作らず、仕込んだらそのまま静置して寝かせるだけだった。裏に味噌蔵という味噌醤油熟成保存専用の蔵があった。

味噌炊きはその大豆を焚く作業、いつどこで入手したのかスウェーデン製の手回し肉挽き器があって、巨大な鍋で煮た豆は熱いうちにそれで潰した。雑菌による汚染防止で器具類や桶の消毒するため大量の熱湯が使われ、豆からも含めて味噌の仕込み時には湯気がもうもうとしていたのを子供心にも覚えている

大土間は、玄関から裏口まで一気に抜けられ、簡単な作業なら土間でできた。

暗い中に起き出して西山へ栗拾い

有明の月光を踏む栗拾い

読み＝ありあけの　げっこうをふむ　くりひろい

季語＝栗拾い（秋）

たまにはこういう楽しみもあったようである。西山は特定に山を指すのではなく、西に見える山の総称、栗拾いに行くのであるから、山塊の入り口、所謂端山に入ったのであろう。歩いて二時間位の距離、楽しい遠足でもあったであろう。家の近所の野生の栗はこの後、クリタマバチという、若い枝に嚢を作ってその先を枯らしてしまう害虫が蔓延し、事実上全滅してしまった。

下道、元岡君令弟遺骨還る二句

《下道（したみち）とは前の畑を挟んだ先にある家。外地で戦死した兵士の遺骨が還ってきたのである。元岡氏の末弟七男氏はこの時点で、シベリア抑留中で生死不明であったが、後生環した。》

葬家訪う新下駄ぬるる露の道

読み＝そうけとう　しんげたぬるる　つゆのみち

季語＝露（秋）

下道の家は前の畑を挟んだ先にあって、その名の通り、土地がやや低めになっている。家から下道に直接行く道は無く、道路を回っていくととんでもない遠回りになるので、畑のくろの踏み分け道を行ったのであろう。

対になっている次の句で短日と詠んでいるので、季節は晩秋、歳時記通りの秋の季語としての露である。

短日の葬家の膳に坐りけり

読み＝たんじつの　そうけのぜんに　すわりけり

季語＝短日（冬）

葬式の働き人の重要な任務は葬儀に来てくれた人を襟首を捉まえてでも膳に着かせる事。また、見舞客は、故人との別れの食事という意味で、形だけでも膳に着くものだそうである。

葬式の飯は、白飯に豆腐と葱の味噌汁それに漬け物だけであるが、それがうまいのだそうである。

黙榮　対になった葬送句　その三

『葬家訪う新下駄ぬるる露の道』

『短日の葬家の膳に坐りけり』

時雨すぐる山畑の麦蒔き急ぐ

読み＝しぐれすぐる　やまばたのむぎ　まきいそぐ

季語＝時雨（冬）、麦蒔き（冬）＝季重ね

麦を蒔くような山畑ってどこの畑か?。私がきちんと記憶にとどめられるようになってからの畑作は、家の周りの一部を除いて全部桑畑になってしまったので、そういう作物のバリエーションは無くなってしまった。

山畑と言っているので、家から遠く、雨が降って来たから、作業中断ではなく、急いででもやってしまえ、また来るのは面倒くさい。

冬木立野の寂光に耕せり

読み＝ふゆこだち　ののじゃっこうに　たがやせり

季語＝冬木立（冬）

難解も特徴の一つとする黙榮句の一句。寂光とは理と智が整った中での静けさの事、だそうである。風の無い穏やかな光に満ちた冬の日、耕す野と冬木立に、ふと神々しさを感じたのであろうか。

昭和二十一年　終り